

## 生活人の心音

石村柳三詩集『夢幻空華』に寄せる

牧野立雄

きつこの作者のころの中には汲めどもつきぬ泉があり、その中で言葉が水のモナドのように舞い踊っているのだろう。それがとても心地よく、私は、誘われるように行って行った。

津軽には三十代前半、よく酒を酌み交わした塾の先生と何回も旅をした。その頃から住んでいる南部・盛岡とは違う風景がそこにあった。南部なのに津軽をこよなく愛したその先生の影響か、それとも学生時代に新宿で見た映画のせいか、あるいは太宰の小説のせいか、津軽には独特の色と音があった。

そういう懐かしい風景が、石村柳三詩集『夢幻空華』を読んで浮かんできた。また、こんな風景もよみがえってきた。

東京に住んでいた二十代半ば、好奇心もあつて、駅の近くの屋台に立ち寄って慣れない酒を呑んだ。

誰が誰よりどうだとか、誰が誰よりどうしたとか、本当はこうなんだとか、そこに立ち寄るサラリーマンはそれぞれに人生哲学を持っていた。その中に、はっとするような「瞬時の叛逆」(『夢幻空華』一二二頁「深夜の酔人」より)を見せる人もいれば、「鎌なす舌」(同一七四〇五頁参照)を持つている人もいた。

こういう塾の先生や屋台に立ち寄るサラリーマンその他、もろもろの大人を石村柳三は、「生活人」と言う。この言葉が実にいい。一般市民、大衆、庶民、常民、生活者など、いろんな言葉があるが、私にはどれもピンとこなかった。政治家やマスコミが言う言葉のように、どこか空々しい響きがあった。「生活人」と言われて、初めて「そうだ自分も生活人だ」と納得した。

《生活人》はなあ

その人その人の世間世俗との交わりもあり  
その住んでいる立場の生命音を背負い 引き

ずり

生きるため 生きねばならぬための生活人歯車  
になるのだ

(『夢幻空華』一二九頁)

(《生活人》万歳) より)

まさにここに「深夜の人生哲学」がある。そして、この新しい詩集には、「生活人」の心の音が、一つの宇宙となつて響いている。子守歌のような調べもあれば、胸をかきむしるような響きもある。その一つひとつが夢であり、華である。

二十一世紀の、今、この時に、この画期的な詩集が誕生したことを喜びたい。

石村さん、やっただね、おめでとう！

(伝記作家・宮沢賢治研究家 盛岡市在住)

## 石村柳三の〈石〉の思想と『夢幻空華』

水崎野里子

《石》は沈黙の存在となって  
澄んだ重さの核をどっしり抱き

小さな村の神社の境内にひっそり座している  
風雪の耐えをしみこませ みつめ うけとめて  
古村の人びとの姿やのどかで厳しい  
自然の風景を映してきた

時代の流れにふれない《石》の沈黙の座姿と  
なつて

《石》のあるべき位置や場所の  
時空を通過し 流露 して

そこには

つねに変わらぬ沈黙のなかに

《石》としての重ねてきた石の時間の魂をつつ  
んで

ゆうゆうと永遠の黙語を放つて

底知れぬ自然回帰の《自然語》を  
やすらぐ季節の風をともなつて孤高のごとき石  
に留めて

《石》は吹く風に自然語の回帰をよるこび  
その沈黙の存在を強くする  
自然の自然を原始風光のつらなりの風景に溶か  
しながら

《石》をうみ

《石》となした

原始永遠の自然のなかにあつて

とてつもなく耐えた時空の黙する自然語をつつ

み

ぶれない沈黙の澄んだなかに形成された

だから《石》は自然のぶれない堅固な世界  
黙するゆえに背負う自然の掟の石の核の音  
それにそそがれる風光の慈しみよ

ふかい沈黙の透明なやさしさとなつて放つ原始  
の声

それが

《石》なのだ

天日の四季の沈黙という い の ち

自然の巡る風雪の古村の《石》の姿に

沈黙のもつ自然語の愛が流れているのだ

ただ一念のごとく 沈黙一如の《石》となつて

沈黙のなかに 沈黙をみつめ 沈黙としてうけ  
とめ

来歴の風景を捉えてきた《石》の永遠の堅固な  
のだ

汗をながし 日焼けして 巡る風景に喜怒哀楽  
し

忍耐の泪をみせてきた古村の人びとよ 泪を

愛 せ

存在することの沈黙の重量さを

存在することの沈黙の大事さを 《石》の感性として

存在することの沈黙の必要さを

《石》の座す沈黙一如に自然語の持つ強い思想  
があるのだ

(「コールサック」65号・二〇〇九年十二  
月二十五日発行)

石村柳三氏の詩集『夢幻空華』について書かな  
いか、とある日鈴木比佐雄氏から電話をいただい  
た。一瞬躊躇し、「忙しくて……」とかなんとか  
苦しい言い訳をしたが、「仏教思想だ。アジアだ。

彼について今書けるのは日本の現代詩の中では水  
崎さんが適任ですよ」との鈴木氏の励ましといつ  
もながらの氏の押し強さと積極性。そうとは知  
りつつも、だがついいつものように承諾してしま  
い、いつものように後悔した。

後悔した、だが「稟文」の名譽。実は内心嬉し  
く是非書きたかったのであるが、「後悔」してしま  
つた理由を一言で言えば、石村氏の、我々のい  
わゆる「現代詩」における位置があまりにも重す  
ぎて、私に言い切れるか、総括し得るか、だが言  
いたいという衆生の煩悶溢れる自問自答がひとつ  
の理由、さらに、この私に石村氏の仏教思想が十  
分に追えてコメント出来るかという揺れ動く疑念  
がもうひとつの理由であった。

初めて石村柳三氏を石村柳三氏と知ったのは、  
ほぼ六、七年前、千葉県の詩誌「光芒」の同人会  
の席であったように思う。私が刊行した詩集『ア  
ジアの風』を持参して「光芒」の同人の方々にお  
贈りしていたら、同人のひとりである佐野千穂子  
さんから「石村さんに差し上げたら」との指示を  
いただいた。佐野さんを介して紹介を受けた氏の  
最初の印象は朴訥さと非スマートさ(注・非ハイ

カラ性、これは賛辞である)、そして眼の光だった。その運命的な出会い(私にとつて)から以後、「光芒」五二号(二〇〇三年二月)に拙著『アジアの風』の書評を書いていた。御縁や、発表の詩、石橋湛山についての著『石橋湛山——信念を背負った言説』(二〇〇四年)、詩論・エッセイ集『雨新者の詩想』(二〇〇七年)、詩集『晩秋雨』などの拝読を通して、石村氏の人と文学の深さにますますと引きずり込まれて行く運命(さだめと読んで欲しい)、生業と相成った。氏が立正大学で仏教(日蓮宗)を学ばれたと聞いたことも私にとつては何かの御縁と感じたことは確かである。私は若い頃ほぼ十年間、立正大学で講師(英語)として奉職していた。(この御縁はやがて鳴海英吉にも繋がる。鳴海英吉も立正大学に日蓮宗の研究で関係していた。鈴木比佐雄氏による『鳴海英吉全詩集』(二〇〇二年)を契機とする「鳴海英吉研究会」を機としても鳴海英吉の詩についての卓越した解釈を読んだりお聞きしたりした記憶がある。氏の法華経理解を通しての宮沢賢治の解釈の独自性に瞠目した経験もある。すなわち賢治の詩にある宇宙の拡がりへの着目である。

「コールサック」でもしばしば氏の詩を拝見するようになった。

千葉県船橋に住む私が「幕張」という千葉県の地に親しみ、「光芒」の例会が開かれる津田沼の地に親しみ、そして千葉県詩人クラブの例会で千葉県の各地に親しんで行く経緯と、私が石村氏の朴訥さ、非スマート性に大いに喜んだという事実は並行する。だが、ある機会に氏は生まれは千葉県ではなく青森であったのか。その理解は氏の詩を以後、二重の「ふるさと・地(トポス)」の背景の中で理解して行く手がかかりとなった。太宰治と同郷の人。宮沢賢治と同じ「空の拡がり」宇宙」を知っている東北出身の詩人。ある時、氏がかかなり太宰を読んでいることも知って嬉しかった。津軽の人太宰を知る現代日本詩人。これは国際的だ! やがて氏の詩を英語に翻訳したい希望を隠して、私は氏との交流に親しんで行った。氏は現代日本の詩に海外から要求されている諸要素を体現している——借り物ではないオリジナリティな思想、哲学、日本性、アジア性、そして土着性(風土性)、だが一方では世界的な諸哲学書を読破

理解している詩人。ハイデッガーも?

冒頭に引用の「〈石〉の思想」と題された詩は石村氏の人と思想を実に端的に表現していると思う。「沈黙」の存在としての石。だがその中に極めて雄弁な思想を宿している存在(実相)。「沈黙の座姿」すなわち座して沈黙する仏陀、菩薩との照応。時代に影響されず、永遠の無言の言葉を放つ存在。それは「自然回帰の自然語(以下、じねん」と読むべきであろう)」である。沈黙の存在は自然への回帰であり、自然が自ずから放つ無言の言語への回帰と出発である。それはまた原始永遠の風光への回帰と出発であり、小さな古村の神社の境内にひっそりと「存在する」一塊の石への作者の共感であり、同化である。石は氏の中で永遠の自然と自然の声を発する実相へと転じる。そしてその「沈黙」の中になによりも重い、雄弁な思念を氏は聞く。それは原始の自然の声である。無声は有声と化し、有声は沈黙の無声に帰す。

氏と初対面での印象であった氏の「眼の光」は、求道者の眼の光であり、自然を見抜く眼光であり、この世で何が尊く、何が尊くはないかを見つめ、凝視し、共に愛する者の眼光であると今思う。そ

して「へじねん」を凝視する者の眼光ではなからうか? 石村氏は自ら石と化すことにより堅固な自然に回帰し、そして永遠の時間の中の無言の座姿(菩薩)を視る。座姿は揺るがぬ永遠の実存だ。石は石村氏、石村氏は石となる。「時間」は永劫と化す。

石村氏の詩の特色は東洋哲学(より正確に言えばインド哲学)を朴訥、だがかなり高度な次元で宿していることである。そしてその高度な次元を留めつつ、氏は一介のさまざまな出来事に出会う生身の人間としての揺れ動き、喜怒哀楽を詩に留める。それは氏にとっては敢えて自然の哲学を人間の生活の生業の中に降下させ詩に造化することであり、菩薩ではなく衆生の人間を敢えて生き、その喜怒哀楽を詩人として敢えて生きることを意味する。そしてその実相を文字に連ねることを意味する。

本詩集『夢幻空華』もまた数々の氏の仏教思想の詩への昇華を宿している。読者はだがそれらが単なる哲学の次元ではなく、我々の生活の中に実体験としてまだ生きています実感であることに気が付くはずだ。「夢幻」そして「空」、「華」は仏教

思想に核となる概念である。「夢幻」を「はかなさ」、「空」を「無」、「華」を「花」と言い換えれば、それは伝統的な日本の文化・思想の伝統に繋がることに気付くだろう。菩薩の座す蓮華は日本文化の中で世阿弥の「花」となり、さくら花と化す。他、詩集中には無数の仏教概念が散りばめられている。それらすべてに言及する力は今の私にはないが、少なくとも私に言えることは、氏はここで一人の生活者としての生き様を生き様としてあるがままに、粉飾も虚飾もなく詩に造化しているという驚嘆である。それは私のように絶え間なく煩悶の中に揺れ動く者にとっては実に嬉しく、親しみ深い。氏は揺れ動く煩悶、日常性の中の葛藤を詩に表出する。詩に捏ね上げる。日常の苦しみ、愛、涙、迷いを華と化す。詩集中特に私の印象に残った記述は、氏の病との対峙の中で凝視した「死」、そして「死から視た生」への回帰であった。だがその「生」とは、菩薩を凝視しつつも菩薩に成り切れぬ人間の実相（実存）をみつめ、夢幻空華の世を生きることでもある。だが生きることとは即「花」でもあるはずだ。

次の詩は『夢幻空華』所収の氏の詩「人間曼陀

羅」である。本詩を特に引用する理由は第一に「曼陀羅」という浄土を表象しまた宇宙を表象する極めて興味深い仏教思想、あるいは仏教文化を氏が言及していることに私はさすがと留意したことである。第二には、この詩の中で詩を書くという作業、そして生きるという実相が、氏の会得した仏教思想を通して端的に氏の言葉で語られているからである。

よく云われるように

「いつまでもあると思うな親と金 ないと思うな運と災難」

人間が生きるといことはこういう有漏を背負う

三界火宅の現実世を渡ることであろう

人間がひきずり ぶらさげねば ならぬ

喜怒哀楽の煩惱の人身

人間という存在のもつ運命の声

〔煩惱即菩提〕の一对の世であればこそ

さまざま人間という仮面をうむのだろう

そうその多彩な仮面の人生こそ

ふるふる雨や雪のごとく

吹く風の枝を鳴らす樹木のように

自由自在の息吹をはなつ人生のさけび

それもまた人間の定めをつつむ愛なのだ

ふりそそぐ自然の慈しみの声なのだ

《人身受け難し》の世であればこそ

耐える衣の人生も必要であろう

喜びの衣の精神も生まれるであろう

人間の有漏の華は消しえぬ《魂の華びら》

だから悲しくも美しい人間のありようをつつむ

曼陀羅幻美

人間曼陀羅は命ある自らの思念愛の境界の壇

ふるふる人生の曼陀羅を洞察して

自らの足元を描く絵図を産め

自らの絵図を自ら描く力こそ

存在する人間

曼陀羅のかがやきを視つめるエナ

ジー

照る日曇る日 風 雪 の 日 も

人間曼陀羅がふるふるふかめる幻の眼

あるがままの人間風景や人間讃河の

自らの切り取る意思の大事さをそこに知ろう

神聖な領域のこと。それを壇だという。また輪円具足ともいう。宇宙世界を図画や文字にされたものに、真言曼陀羅、法華曼陀羅などがある。チベットの砂絵曼陀羅もある。(石村氏注)

曼陀羅、すなわち仏の悟りの境地、とは世界、あるいは衆生の求める究極的な理想の境界を志向する。浄土を意味するとも言われる。輪廻（円形）を図解するとも言われる。それはウパニシャッドやリグ・ヴェーダを源流とするインド哲学の中枢に位置する広大な宇宙観の拡がりとも照応する。氏はだがこの「曼陀羅」思想を「人間曼陀羅」と言い換える。そして宇宙と人間との対比の中に、氏は有漏溢れ、煩惱溢れる人間のありようを「悲しくも美しい」また「人間讃河」と詩で掬い取る。仏法の有漏とは漏れ、すなわち煩惱のある状態を意味する。三界とは衆生が生まれ、また死んで往來する欲界、色界、無色界であり、過去・現在・未来の三世とも言われる。火宅とは煩惱や苦しみに満ちた現世の意味で、現世を火中の燃える家に喩えた用語である。現世の中で火に焼かれもがきのたうち回る、だがそれでも生きよう

\* 曼陀羅とは仏の菩薩ぼさつの境地を意味し、本質、精髓

とする人間の業を掬い取ること、輪廻（円形）という宇宙の中での人間のたうち、火宅ぶり。衆生の存在の小ささは広大な理想の宇宙と対比され、理想の宇宙は衆生の哀れなる生き様と対比され、両者は照応し合いつつ「人間曼陀羅」の絵図となる。見事な詩造化である。それはだが一方では、氏ばかりではなく日本文学が古典・近代文学も含めて成し遂げてきた親しみ深いテーマでもある。だがともすると「近代・現代詩（新体詩）」からは漏れてしまった作業でもあるのではないか？ 詩人としての石村氏の、詩の分野での今の時点でのその補填は嬉しい。仏法の基本のひとつはやはり、その有漏溢れる人間衆生を救うことでもあるはずだ。「さげび」を捉えることでもあるはずだ。氏は哀れなるその人間の叫びを愛と捉えている。氏の仏法理解の深さであろう。氏の詩集中、人間的な属性と理解され得る恋やエロスもまた詩に造化されるが、これは「色界」に属する生業として日本文学の中では古典文学から現代文学までむしろ特色となるテーマである。

## 泥中蓮華の偈

石村柳三詩集『夢幻空華』の世界

鈴木豊志夫

石村柳三氏（以下敬称省略）と出会って、既に三十年余は経つと思われる。当時、業界紙の新聞記者だったと記憶していたが、この詩集の校正刷りを拝見して、あるいは退職後だったかもしれないと思った。最初の出会いは、今はない千葉県現代詩人会か、あるいは詩誌「光芒」の集まりだったと思う。その後特に印象に残っているのは、私の記憶が正しければ、それは二十七年前の一九八三年秋、千葉の県庁ロビーでの偶然の出会いである。彼の姿には菩薩行に打ち込む者特有の光背が見え、私は心の中でひそかに合掌したのであった。今回、本著を拝見し、幾分か自分の直感を信じてよよいと思った。しかし、こんにちでも私は彼の私生活の知識はほとんどなく、彼の著作を通じての関係のみといえる。

詩集『夢幻空華』はいわば「石村柳三詩集成」

ス」を見失って来た歴史は残念と思う。石村氏の詩業はその手薄・欠格（ニアシアの悲劇）を補い、「現代詩」をはばかることなく古来のアジアの歴史的な伝統的な哲学と結び付けることで、むしろ現代性（日本現代詩にとって）と普遍性（現在のアジアの文化への世界的な期待の中で）を具現した。それはむしろ日本の近代詩が「イズム」志向の下に摺り損ねて来た国際性ではなからうか？ 氏は千葉の人、青森の人として、その現在の時点での詩の国際性を、遙かなりグ・ヴェーダを極めて身近な基盤として掬い取った。それは日本の現代詩をより広大な世界へと開き、普遍性へ導く道であり、「三界火宅」とダンテの「地獄・煉獄・天国」（『神曲』）とを結び、禅思想とハイデッガーとを併置させ、リグ・ヴェーダを日本の現代詩と対峙させるダイナミックな国際性でもある。それは日本の詩の未来を指針している。

ここに我々が誇るべき、確固としたアジアの、自己の、アイデンティティ確立を苦闘し得た一人の詩人がいる。津軽の風は日本の風、そしてアジアの風へと変化する。風は華となる。それはやがて世界の華と転生するだろう。

ともいうべき大冊である。校正刷りを拝見し、私は、全八章、二百十六篇の詩群に圧倒された。そこには私が詩に出来ない讃歌の世界があった。分析や批評を許さない精神の聖域である。

わたしの出自したつがるのふゆは  
農民のあせによるさいこの収穫もすみ  
ほつと一息つくころ

北風の合図とともに  
みぞれや落葉をつれそつて  
目を揚ぐ霊峰岩木山をこえ  
野や畑の田園に足ばやにやってくる  
すべてのものを白いシートでおおうように  
七つの雪化粧のかおをつくり  
かたる口元をおもくする息吹をともなって

こうした雪のくらしに  
耳のおおくなった老いた母は  
今年も九十三歳の  
風土の女のさがをせおつて  
生きてきた証をのこすだろう  
九十三回の雪化粧の跡の愛として

ひとのなみだの

風雪の悲喜をひきずりながら

〔『夢幻空華』二一五頁〕

「老母への讃歌」より部分）

私を僧門に入れ

僧になることを願った野の父の眼に反し

私は僧にもなれず勤め人にもなれず 今こうし  
て

都会の谷間の望遠鏡から

かなしくわれを問う《吾が有る時》の野の父を

見る

〔『夢幻空華』二一七頁〕

「野の父に眼をとして」より部分）

石村柳三を詩人にしたのは、父母であろう。それほどに父母への思いは強く大きい。詩「老母への讃歌」は二〇〇六年正月の作、「野の父に眼をとして」はいつ作られたものかは不明であるがこの心の目線は彼が生涯いだけ続ける父への思いであり、自らに課した呵責であろう。望遠鏡の先におぼろに霞む父の姿を「枯れ木に止まるやせた

鴉のような 父よ」（同）と歌う農業にいそむ父はすでにいない。四十九歳で亡くなっていることを詩「鏡の中の四季」で教えられる。そして石村柳三を詩人に育てたのはふるさと津軽の風土であろう。

「ふるさとは血があるのだろうか」

「血はある」

「風土という消しえぬ血の絆が」

（中略）

出自した原風景の残像色をひきずり、わたしの  
人性の眼底に消しえぬ〈津軽の幻想〉をぶら  
さげてきた。

（中略）

ふるさはそこに生き消えぬ眼の結節の分身の  
里なのさ

〔『夢幻空華』三二一頁〕

「ふるさとの血」より部分）

私には、そのふるさとが津軽であることがすでに詩である。私自身、兼業農家に育ったので農業の手伝いは日常的であった。しかし、温暖な房総

半島からは想像できない厳冬季と宮沢賢治が「寒サノ夏ハオロオロ歩キ」と歌った冷害の不安の中での北国の農業は別儀である。私は賀川豊彦らの作った農業団体を職場としたことで多くのことを学ばせていただいた。また仏教にも常識程度ではあるが多少親しんだこともあって、かねてより石村柳三の精神風土に親近感を懐いている。

散華の園にかれ葉が舞い

秋ふかい雨が しとしと ふる。

悪寒の吐息けふる恐山の朝は

焼けただれた硫黄岩の煙に浮かび

ウオアン ウオアンと

鬱屈した死者たちを呼ぶ。

〔『夢幻空華』二一〇頁〕

「散華の園」の第一連より）

恐山はいわゆる仏教の世界を逸脱したもの、土俗の信仰を包含している。それは東北の仏教が本来人間の持つあらゆる面を育んできたことを物語っている。尤も、仏教自体、石村が好んで引用する「スツタニパータ」や「法華経」はともかく、

二千五百年余の仏教の生成発展の過程で古代インドや東アジアの土俗信仰をたつぷりと吸収している。恐山は極東の「極」の立派な仏教文化である。詩人の宗教性に触れる前にどうしても触れたい詩がある。

石村柳三に詩を書かせたものがある。そして、それを贈ったひとがいる。

北国・津軽で教師をしている彼女から

真新しい万年筆が贈られてきた

私が夢にまで見たモンブランの万年筆を

〔『夢幻空華』二二六頁〕

「万年筆」の冒頭部分）

この「彼女」抜きでこんにちの詩人石村柳三は存在しないと私には思われる。冒頭で詩人の菩薩行の感応道交に触れたが、その行は万年筆のひとの菩薩行を因となすものかもしれない。また活字の縁にこだわらないこれらの詩群は、その化身としての万年筆が書かせた一万行にも受け取れる。石村柳三に詩を書かせたことがある。

我は歳の瀬に失職す

我が妥協を許さぬが故に失職す

我は私の回転する心をなげく

時計の針の刻みに

不安と回転の影をおののく

風の悲しみとなつて

なにが故に

なにが故に我は

私の心に妥協を許さないのか

『夢幻空華』六六頁「晚秋悲風」より部分

妥協を許さない心。それは正義であつたかもしれない。己の存在事由を犯すことがらだつたのかもしれない。事実、上司や役員が間違つていたのかもしれない。しかしここには、たとえ正義であつたとしても、それが己の存在を否定するものからの防衛であつたとしても、詩人にとつて、その本質は他者には求められない自己の心の問題として捉える。しかもそれをひとつの己の欲望の形として捉える詩人の姿がある。詩人のいう「有漏」の世界である。

『碧巖録』である。

石村柳三の固有の詩的営為とは、禪の問答ならぬ《有漏》、一〇八の煩惱に詩（頌または偈）を付けることではなかつたか。この「幻裸の花火」の「裸」とは、私たち人間も生まれたときは「無一物」そして、あの世にもなにも持つてはいけなものである。順序が逆になつてしまつたが「幻裸の花火」一連では「幻にはいっしゅんの秘められたエゴがある／花火師の執念のメッセージと／見物する人の欲望の眼の感応のやさしさに／花火は一直線に上り／いっしゅんのエゴを吐き／無化させ／自らの秘める本然の裸の美をみせる／パッと散るエゴの裸の見事な《無》をうんで」とある。

ここで詩人は「エゴ」と呼んでいるが、その言葉の持つ差は詩の一篇一篇が独立した宇宙の中にあつての使い分けであろう。「エゴ」「有漏」「欲望」「煩惱」「貪瞋痴」「三毒」そして「修羅」「三界」「欲界」「色界」と詩集中にあるこれらこそは、詩人石村が自らのテーマとして真正面から向き合つた「曼陀羅」の表裏の世界である。

「裸身の華」や「快樂」の詩篇は「人間曼陀羅」の編に納められているが、この一連の作品は

ひとときの大輪の夢に酔いつつも  
どこか悲しい虚飾のところがうずく  
おれの身軽な裸になれないエゴが  
眼底と胸に念珠のようにつらなり  
花火のような《転化》の美をうめないでいる  
天空の花火のように散ることを知らない  
無化する裸身の軽さの美しさも知らない  
あるがままの幻の裸の花火をもとめつつも！

『夢幻空華』五一頁

「幻裸の花火」より部分

石村柳三の詩とは何なのだろうと、この大作品群を拝読しながら、絶えず自らに問い続けた。ヒントはこの詩行の中にあるような気がしたのである。石村詩とはなにか、詩人の詩的営為とはなにか。

『碧巖録』の原本は、宋の雪竇重顕（九八〇〜一〇五二）が、それまでの禪の問答から百則を選定し、各々に詩（頌）を付けたもの『百則頌古』とされる。さらに圓悟克勤（一〇六三〜一一三五）が「垂示」「著語」「評唱」という前置きや寸評などを付けたものがこんにち伝えられる

大乘仏教の「大楽」の世界「生死即涅槃、煩惱即菩提」を歌つたものであろう。「理趣経」のいう妙適、欲箭、触、愛縛、一切自在主、見、適悦、愛、慢、莊嚴、意滋沢、光明、身楽、色、声、香味の十七清浄句を現代詩として蘇生しているといえよう。

「化城の世人」の第七章に入り、詩人の営為が「有漏」を極めることで「無漏」の世界、仏の無上慧に近づくことを目指していることが判る。

立ちどまれ

くねくね自影自心をひきつづけるわれら人よ

時という無常の空間に

感性の匂う自我の確認と

呼応の眼をむけよう

われらが歴史を（足の眼で）ふみ生きたため

にも

『夢幻空華』二〇二頁

「予感の眼」より部分

石村柳三の詩はあたかも詩的神通力で創出された「化城」のようだ。ここでの「時」とは法華経

化城喻品第七でも述べられている「劫」と同じである。「われらが歴史」とは「是くの如く、一小劫、乃至十小劫」の「劫」の連なり、「無量劫を通達す」の「無量劫」の「劫」として受け取った。

敢えて詩人に神通力の素因を求めるとするならば、働きざかりに健康を害し、闘病生活の末、ここ十余年、週三日の人工透析に通い、しかも腎臓癌（平成十二年手術）を体験するという受難を負いながら、そのことを秘めて多くの作品を創出していることにある。この詩集は生きるひとに勇気を与えてくれる化城のごとき、峠の一服の安らぎが得られる一冊である。

さて、『碧巖録』の「頌」以前に、実は私は雪竇重顕の陰徳を今日に伝える雪隠の話を連想したのである。下座の精神、解脱者ならでの行為を石村柳三は出来るひとなのである。「よろずを有漏と知りぬれば阿鼻の炎も心から」（梁塵秘抄二）を知った人、涅槃の境地に近い菩薩行の実践者だから大欲が書けるのであることを付言したい。

詩人はただ単に言葉を遊ぶ幻影者ではない

詩人は詩語を感性認識の世界に自然遊戯せる  
真の幻視者

〈見者〉なのだ！

（『夢幻空華』二〇三頁「眼球」より部分）

現代詩語の呪縛から脱け出せない私としては、  
詩人の言葉への全幅の信頼が新鮮に覚えて、この  
感動の出会いをあらためて感謝したい。 合掌！

石村柳三詩集『夢幻空華』栞解説文  
牧野立雄／水崎野里子／鈴木豊志夫

コールサツク社

2010